

石神遺跡第6次発掘調査現地説明会資料

昭和61年11月8日

奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

清水 真一

はじめに

当調査部では、昭和56年度から継続して石神遺跡の調査を進めている。今回の第6次調査は昨年度の第5次調査区北に接する水田（東西65m、南北13m）を対象とし、8月4日に着手した。発掘面積は約850㎡である。

調査の結果、7世紀中葉から8世紀初頭にかけての遺構を検出した。調査はなお継続中であるが、重複関係、従来の調査の所見等からおおむねA～Cの3期に大別できる。

調査の概要

A期（7世紀中葉）

A-1期の遺構には掘立柱建物A、B、掘立柱塀A、石組溝A、B、石敷Aがある。石組溝Aは第4次調査で検出した7世紀中葉の井戸から北にのびる暗渠である。溝底内法幅0.6～0.8m、深さは地表下1.2mである。A-2期に



蓋石をはじめ、側石の多くが抜き取られ、側石1段分が残る。石組溝Bは、第3次調査区で検出した南面大垣をくぐり、北流する開渠で、調査区東端で西側石および底石の一部を確認した。掘立柱建物Aは西北部で検出した梁行2間、東庇付きの南北棟で、桁行1間分を確認した。建物の西約1.5mを隔てて石敷Aがある。幅1.2m、南北4m余りを確認した。比較的小振りの石を敷き詰めて、東縁には人頭大の石を据える。掘立柱建物Bは調査区中央部で検出した梁行2間の東西棟で、桁行2間分を確認した。西半部は石組池によって壊されている。掘立柱塀Aは、第5次調査で検出した総柱建物の西側柱筋に取り付く南北塀である。

A-2期の遺構には、回廊とこれに伴う石組の雨落溝、掘立柱建物C、D、E、石組溝C、石敷B、Cがある。回廊は南面大垣から北にのびる梁行約5m、桁行約2.5m等間の単廊である。今回調査で大垣から北29～33間目を検出したことになる。30～32間目では、棟通りにも柱が立ち並ぶことから、楼閣風建物などが考えられる。抜き取り穴の一部に壁土が混じる。雨落溝は断面逆台形を呈し、水落遺跡と同様な手法をとる。回廊西側の掘立柱建物Cは、回廊と同様雨落溝に先行して構築している。建物Cの南方は、第5次調査区内で石敷が広がっており、北方の石敷Bも西雨落溝から一連で広がっていたものと判断される。

掘立柱建物D、Eは、第5次調査区北端で検出した桁行12間の東西棟建物の両端に接続する梁行2間の南北棟であり、調査区外北方にのびる。桁行、梁行とも柱間約2.1m等間である。北方にも東西棟の存在が予想され、四周に建物を配した一院を構成していたものと思われる。梁行2間と狭く長大であることから、廊的な性格を併せもっていたものであろう。建物Dの西柱筋はA-1期の暗渠（石組溝A）の石を抜き取って布掘りの掘形とする。石組溝Cは石組溝Aに代わる暗渠であり、溝底は内法幅0.4～0.5m、地表下1.2mにある。蓋石は地表に直接面を露出していたものとみられる。石敷Cは回廊東雨落溝から建物Dの間を一面に覆っていたものと考えられ、暗渠に向かって緩やかに傾斜する。暗渠は井戸からの排水と併せ雨水処理を兼ねている。

B期（7世紀後半）

A期の遺構を総て廃棄し、根本的に改める。検出した遺構には、掘立柱建物F、

G、H、掘立柱塙B、石組池、バラス敷がある。

掘立柱建物F、Gは互いに重複する総柱建物であり、建て替えが行われたものであるが、前後関係は不明である。掘立柱建物Hは、梁行2間の南北棟であり、調査区外北方にのびる。石組池は内法約6m、深さ0.8mの正方形の池で、側石を積み、底にバラスを敷く。側石は2～3段積み重ねるが隅部に立石を据えて構造的な工夫をこらしている。掘形はA-2期の掘立柱建物Dの掘形を切る。取水及び排水のための施設はないが、側石の裏込めおよびバラス敷の下には厚く粘土を詰めていることから貯水施設であることは疑いない。バラス上は7世紀後半代の遺物を含むバラス層で短時に埋め立てられる。

C期（7世紀末～8世紀初頭）

C期の主な遺構には掘立柱建物I、掘立柱塙C、D、E、F、素掘り溝A、Bがある。

掘立柱塙Dの掘形は掘立柱塙Fに切られ、また掘立柱塙Eは素掘り溝Aで切られること、加えて遺構の方位にも相違があることなど、C期の中でもなお数時期の変遷があったことがわかる。

出土遺物

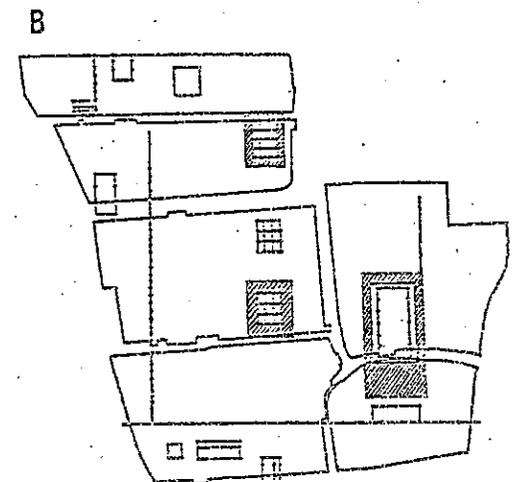
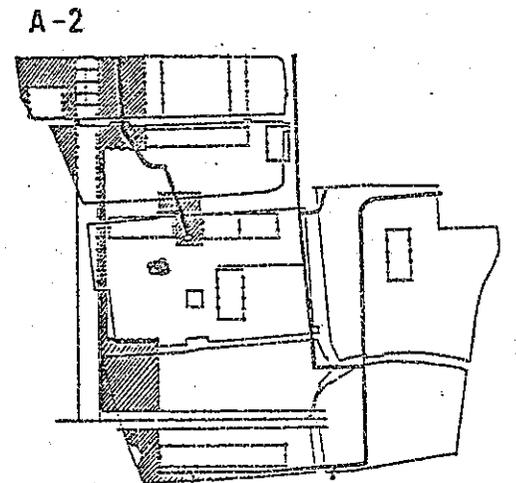
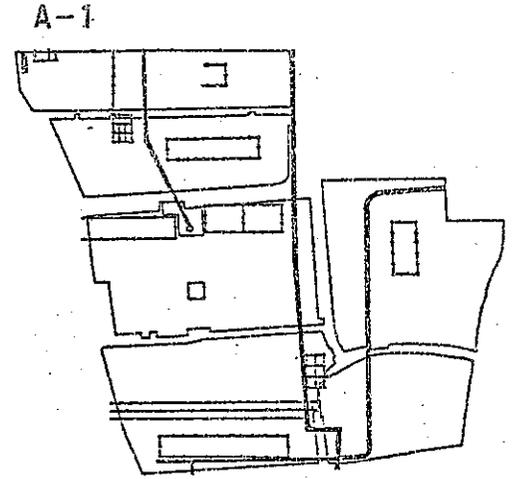
出土遺物には、土器類、瓦類、金属製品、石製品などがある。土器類には、多量の須恵器・土師器、少量の縄文土器とともに土馬2・陶硯1がある。瓦類は全体に出土量が少なく、軒瓦としては飛鳥寺創建瓦など3点の軒丸瓦が出土したにすぎない。金属製品では、無文銀銭1枚が特に注目されるほか、鎌・刀子・鎌・斧・釘などの鉄製品、帯金具かとみられる銅製品がある。石製品には、砥石・鎌・斧・剝片などがあるが、多くは縄文時代の遺物である。

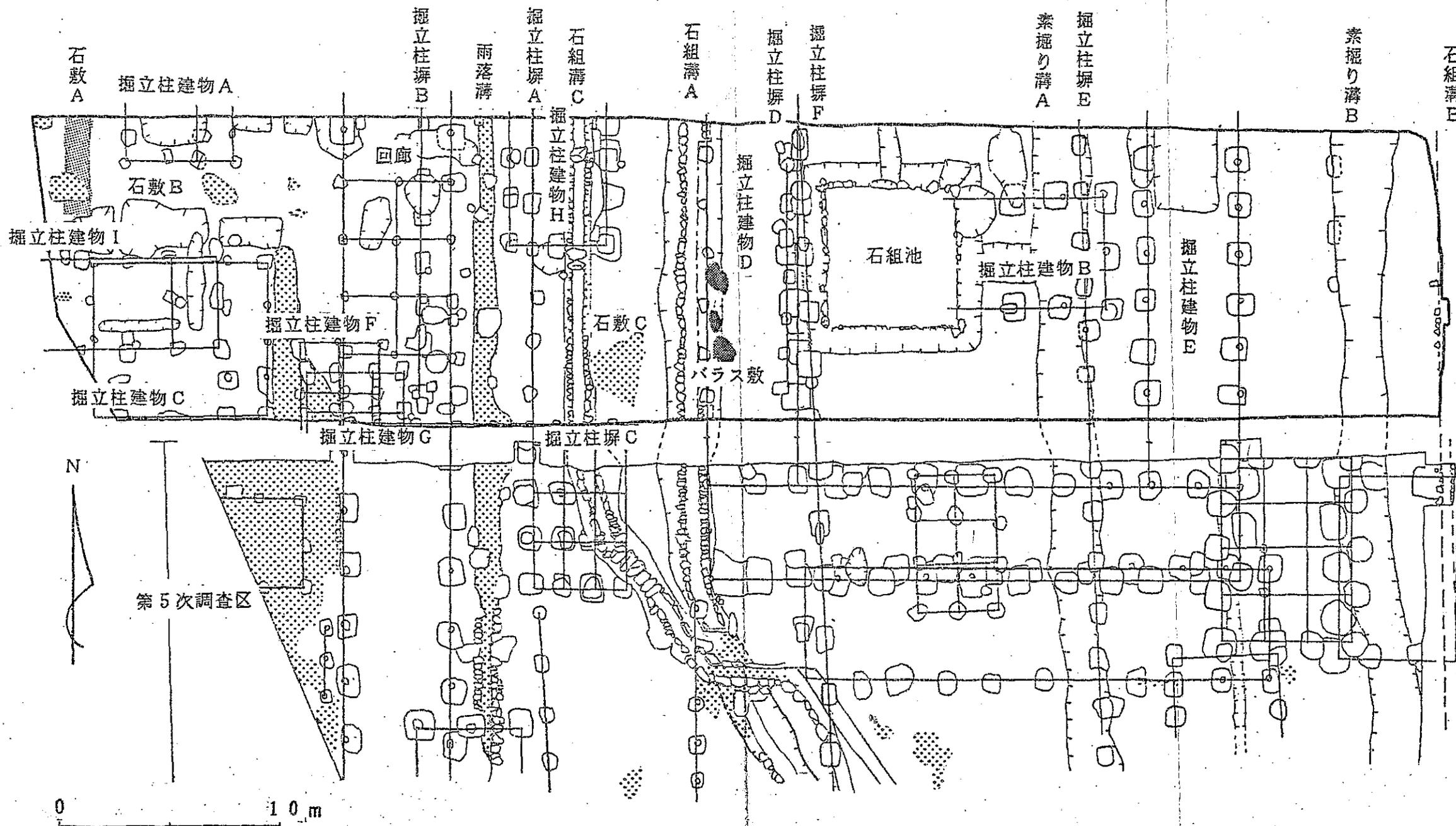
おわりに

今回調査の結果、A期には南面の大垣を外郭とする広大な一面に西面を回廊で閉ざした内郭が存在し、その内側に整然とした殿舎配置が存在することが明らかとなり、斉明朝石神遺跡の中核部に迫ることが出来た。遺跡の性格はなお今後の

調査に委ねるべき点が多いが、明治35年に出土した須弥山石や石人像、また第1次調査以来明らかにしてきた、屈曲する石組溝や石敷広場の存在などから、この地域が斉明紀に度々あらわれる饗宴の場であることは首肯できよう。なお今回検出した殿舎群は、饗宴のための広大な一面の中でも特に重要な性格を持っているものと思われる。

B期はA期と性格が一変するが、天武朝石神遺跡も斉明朝に引き続いて広範囲にわたって公的施設が営まれており、前回の調査までに四周を石敷で囲った建物群の存在が明かとなっている。今回検出した方形石組池は、堆積層がないことから日常的に手入れが行き届いていたことを示している。その用途は明かでないものの、重要な性格を担っていたことは疑いないと思われる。





石神遺跡第6次発掘調査遺構略図